

## 第2章 2021年慢性透析患者の動態

### 1. 臨床背景

2021年の患者調査票において、性別、年齢が記載されていた人数は336,179人であった。このうち男性は222,928人、女性は113,251人で、全体の平均年齢は69.67歳であった（図4、補足表4）。平均年齢は年々増加傾向を示している（図5、補足表5）、最も割合が高い年齢層は男女とも70～74歳であった。また65歳未満の患者数は2012年から減少し、70歳未満の患者数は2017年から減少している。つまり、わが国の慢性透析患者数の増加は、70歳以上の患者数の増加によるものであることが分かる（図6、補足表6）。

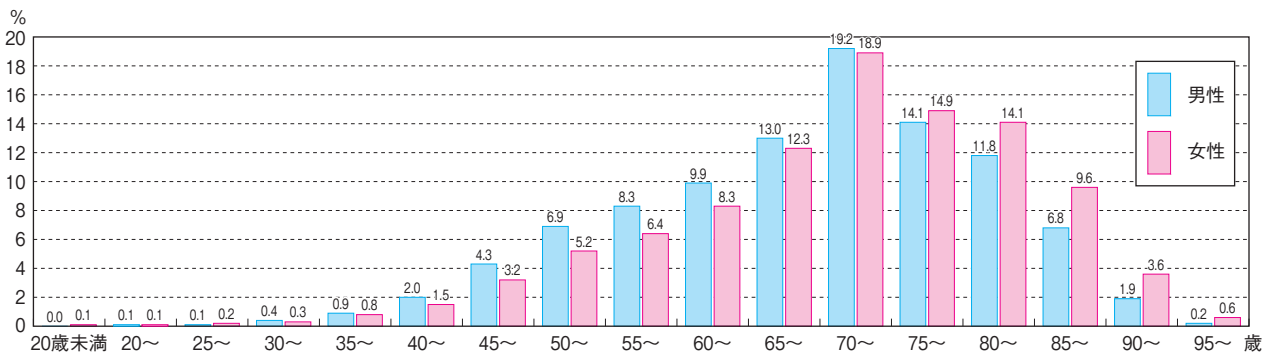


図4 慢性透析患者 年齢と性別, 2021 (患者調査による集計)

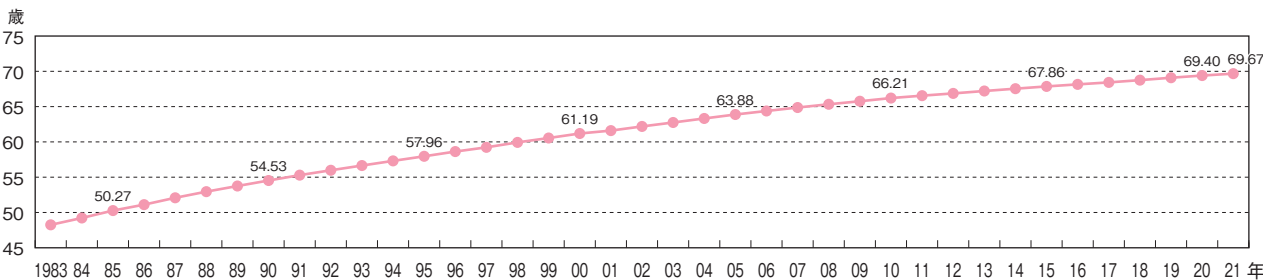


図5 慢性透析患者 平均年齢の推移, 1983-2021 (患者調査による集計)

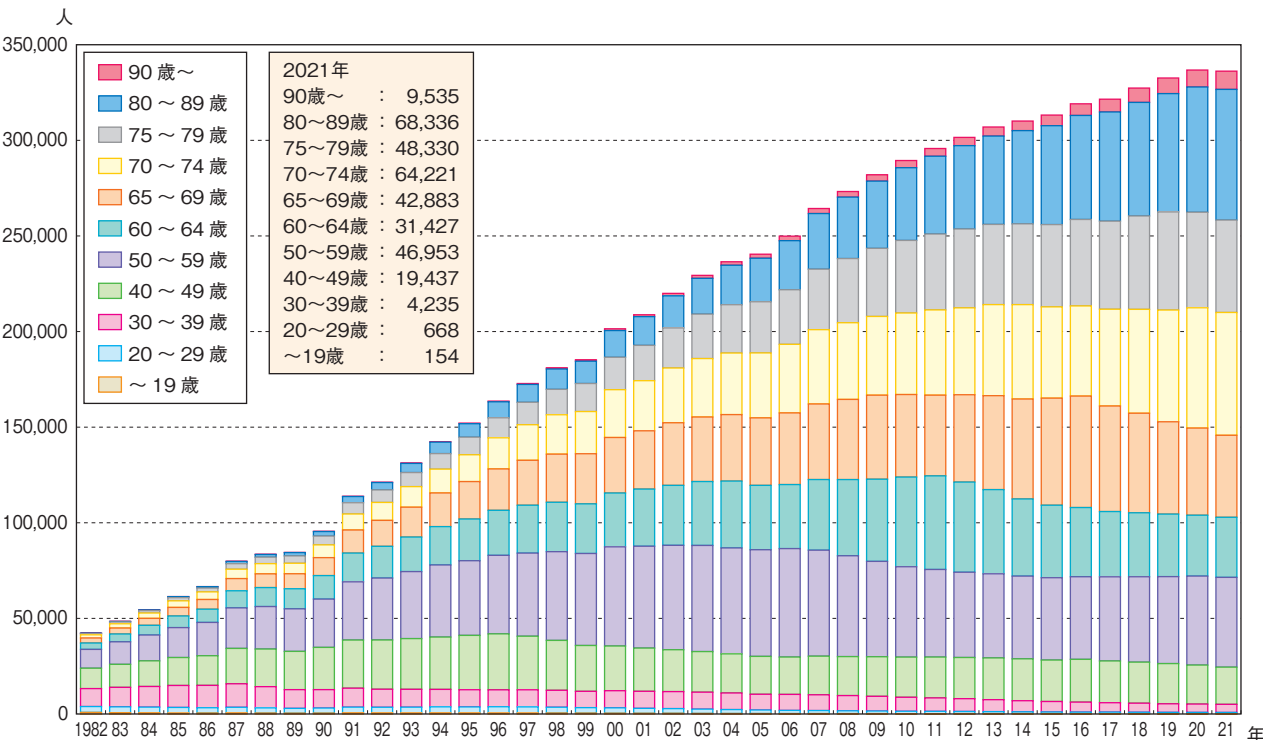


図6 慢性透析患者 年齢分布の推移, 1982-2021 (患者調査による集計)

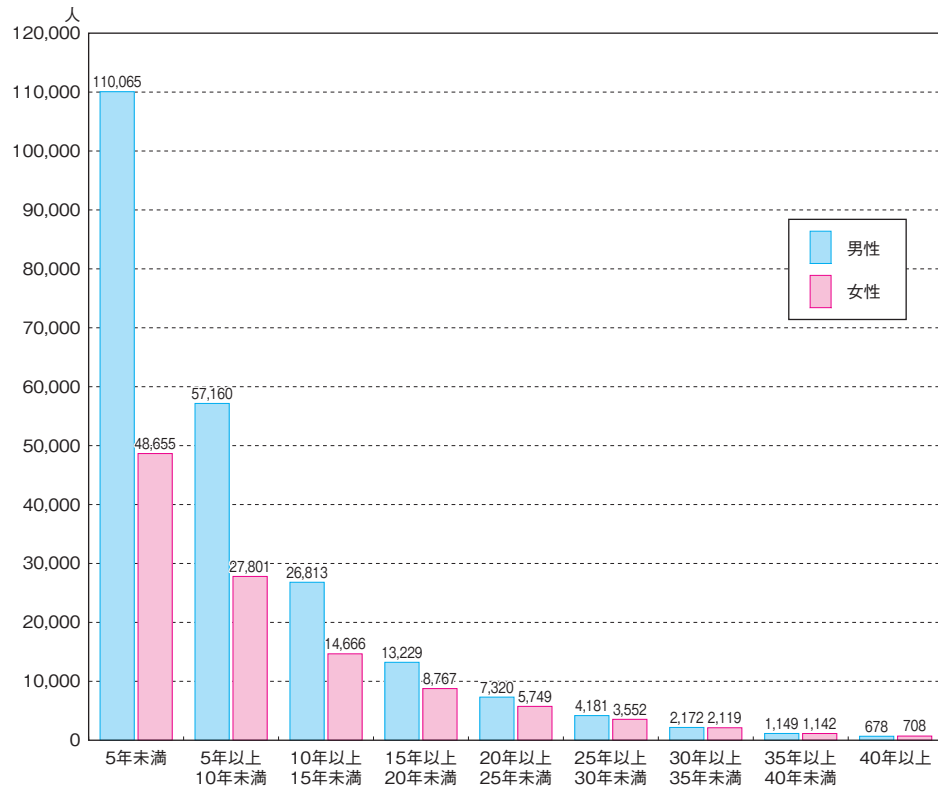


図7 慢性透析患者 透析歴と性別, 2021

(患者調査による集計)

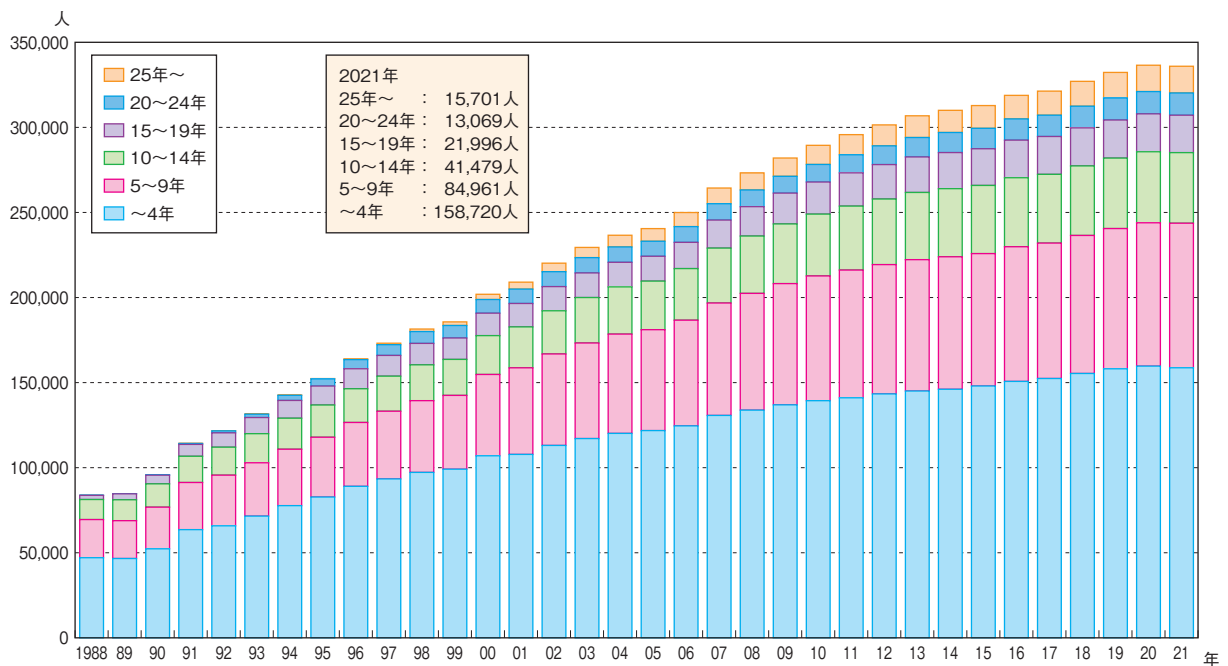


図8 慢性透析患者 透析歴分布の推移, 1988-2021

(患者調査による集計)

2021年末時点の慢性透析患者の平均透析歴は男性6.86年、女性8.45年、全体で7.40年であった。透析歴5年未満が全体の47.2%を占め、透析歴20年以上は8.6%、30年以上が2.4%、40年以上が0.4%であった(図7, 補足表7)。最長透析歴は52年8ヵ月であった。透析歴の長い患者は増加しており、10年以上の透析歴を持つ患者が27.5%に達している。1992年末には1%に満たなかった透析歴20年以上の患者は、2021年末には8.6%に達している(図8, 補足表8)。

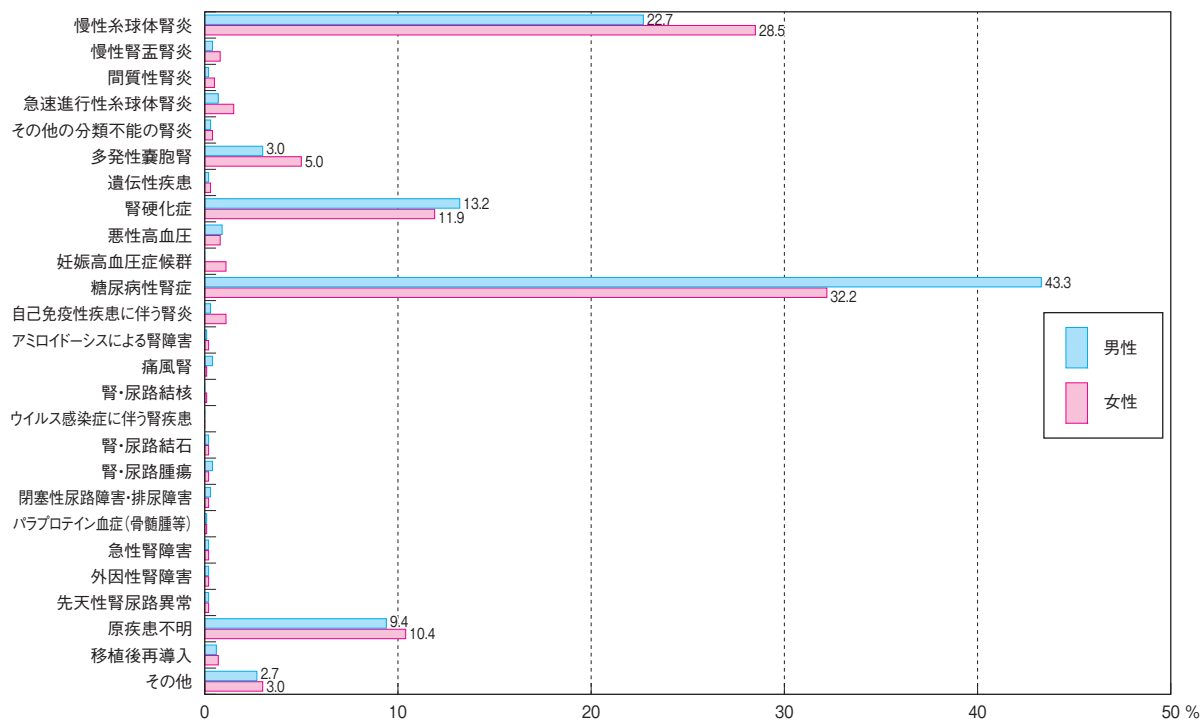


図 9 慢性透析患者 原疾患と性別, 2021

(患者調査による集計)

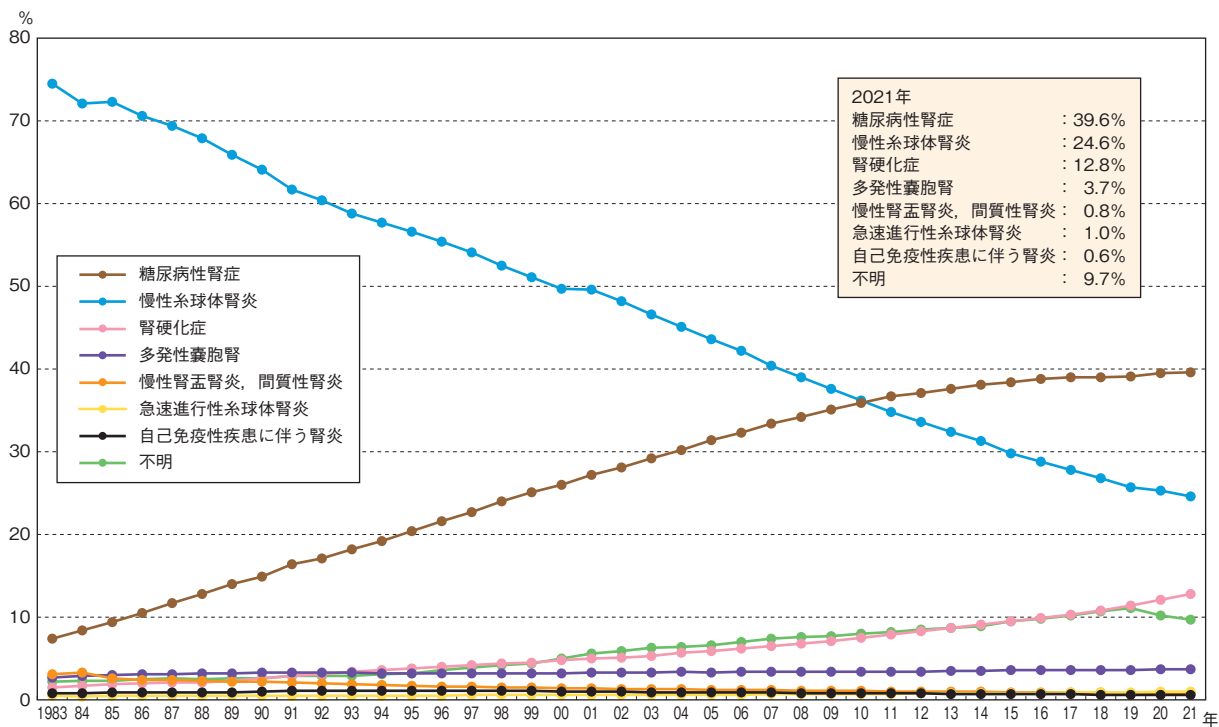


図 10 慢性透析患者 原疾患割合の推移, 1983-2021

(患者調査による集計)

2021年末時点の慢性透析患者の原疾患で最も多いのは糖尿病性腎症の39.6%で、次いで慢性糸球体腎炎が24.6%、腎硬化症が12.8%であった(図9, 補足表9)。糖尿病性腎症の割合は、2011年に慢性糸球体腎炎に代わって原疾患第1位になって以降も持続的に上昇しているが、近年は微増から横ばいを推移している。慢性糸球体腎炎は直線的に減少し、腎硬化症は持続的に上昇している(図10, 補足表10)。なお、原疾患コードは2017年末調査で一部変更しており注意が必要である。

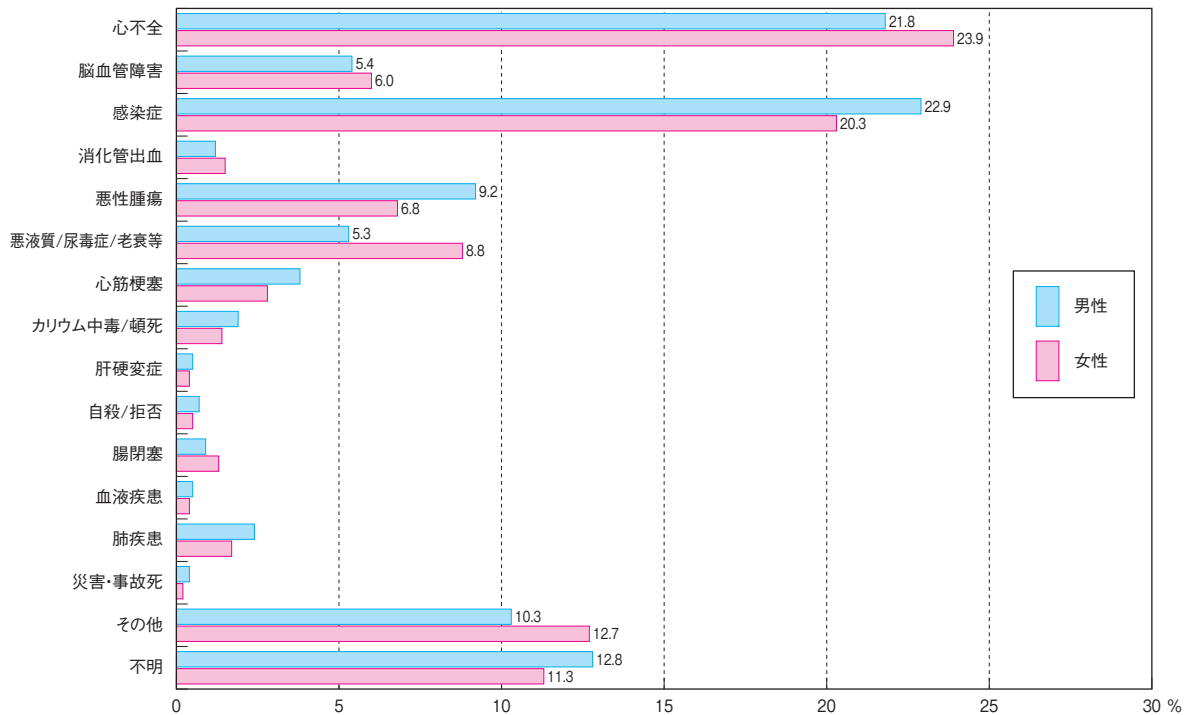


図 11 慢性透析患者 死亡原因と性別, 2021

(患者調査による集計)

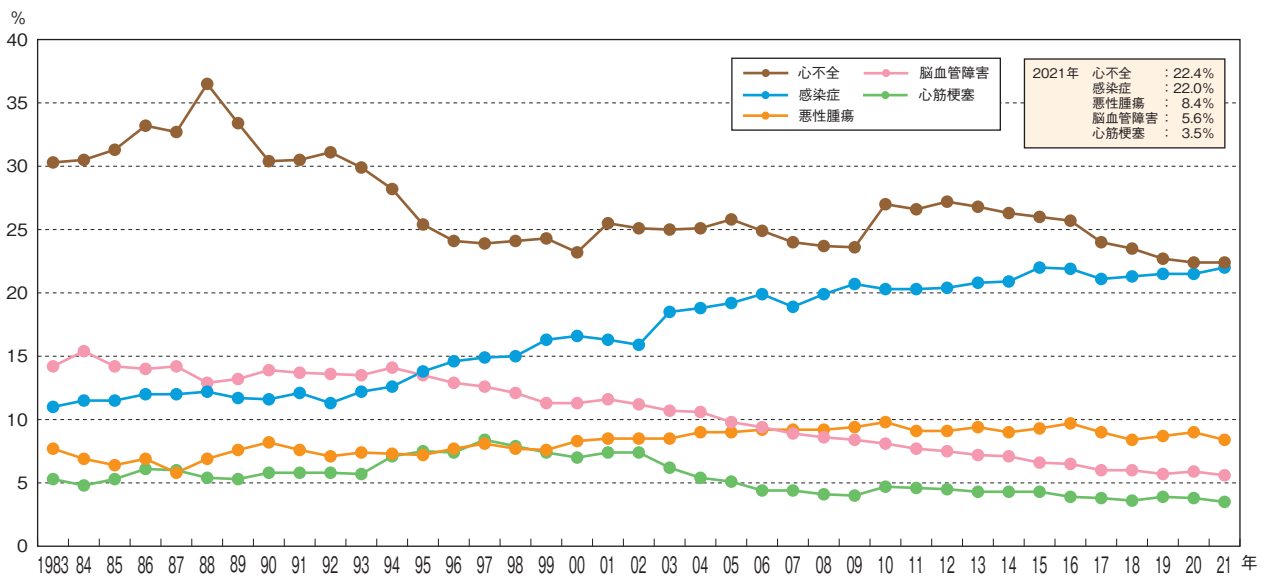


図 12 慢性透析患者 死亡原因割合の推移, 1983-2021

(患者調査による集計)

## 2. 死亡原因

2021年の施設調査票では、36,156人の死亡が報告されていたが、患者調査票において死亡原因と性別が記載された患者数は34,579人であった。死亡原因は多い順から心不全、感染症、悪性腫瘍、悪液質/尿毒症/老衰等、脳血管障害で、それぞれ全体の22.4%、22.0%、8.4%、6.4%、5.6%であった。その他は全体の11.1%であった。心不全、脳血管障害、心筋梗塞を併せた「心血管死」の割合は、31.5%であった（図11、補足表11）。

死亡原因の推移では、1983年から心不全による死亡が最も多く、1995年以降、25%前後で推移していたが2013年以降漸減傾向にある。一方、感染症による死亡は1993年以降増加傾向を示し、2015年からは21.5%前後を推移していたが、本年は22.0%に達した。COVID-19パンデミックが影響した可能性がある。脳血管障害は1995年以降漸減傾向にある。心筋梗塞による死亡も、1997年の8.4%をピークに漸減傾向である。悪性腫瘍死は1987年の5.8%を底に少しずつ増加していたが、2004年からは9.0%前後を推移している。前述した心血管死の割合は、1988年には54.8%であったが一貫して減少し、2021年には31.5%であった（図12、補足表12）。なお、本調査における死亡原因分類コードは、2003年末、2010年末、2017年末調査の3回改訂されていることに注意が必要である<sup>9)</sup>。